
ひぐらしのなく頃に別談

Another

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に別談

【Nコード】

N9912I

【作者名】

Another

【あらすじ】

東京から雛見沢に転校してきた少年が決まった運命に新たな歯車として加わって惨劇と……喜劇の……幕が開く。

最後に過度な期待はせずに台本書きに注意して読んで下さいなのです。にぱ〜

（突通し編12話から台本ではありません）

第一章 突通し編 1（前書き）

少年は真実を求めた

少女は仲間を信じた

少年は協力を誓った

少女は本当を求めた

貴方は嘘を少女に吐いた

少女はそれを信じようと

貴方達は嘘を真へと

嘘が真に変わるとき

真実は偽りへと変わり

貴方は漸く後悔するけど

遅すぎる

いくら懺悔しようとも

時は巻き戻せないのだから

I s u k a D e k a n a

ひぐらしのなく頃に別談

第一章 突通し編

間違いに気付いても貴方は取り戻せない

何故ならば信頼を失ったのだから

第一章 突通し編 1

突通し編 1

カランカランカランカラン

紗都子

「さあ！！圭一さん、
覚悟なさいませ」

梨花

「先にかわいそかわいそ
なのです、にぱ」

分校に予鈴が鳴りほくそ笑
む紗都子とこれから起きる
惨劇を想い存在しない彼の
頭を撫でる梨花ちゃん

コツコツ

紗都子

「来ましたわよ！梨花、」

梨花

「ボクに手を
汚させるのですか？」

教室のドアの横で紐を握る
梨花は抗議の意味を込めた
眼差しを沙都子に送る

紗都子

「梨花には指一本ッ
触れさせませんわ!!」

おゝほほと変な笑い声を
出しながら沙都子は無い胸
を叩く…因みに梨花ちゃん
の胸よりは有る断言しよう

梨花

「失礼ね!!」

紗都子

「ん、梨花!？」

なんでもないのですにぱゝ

苦しいな梨花ちゃん?

梨花

「（後で覚悟するのね?
地の文!!!!!!）」

ガララ

教室のドアが開きその足が
紐を引っ掻け…ない！！

だがこれは予測済み第二の
トラップが発動紐を越えた
先に鍬が置いてあり刃の部
分「木」を踏み挺の原理で柄
が彼に迫る―が右に躲した
柄にはピアノ線が括り付け
てありそれは教室奥のロッ
カーに繋がっていて彼が躲
す事により開く仕掛けで中
からバレーボールが物凄い
勢いで発射される

「ッ、（躲したら黒板に当
たって跳ね返る―その軌道
は予測しづらい小さな子に
当たったら事だな―、）」

この間0・08秒そして―

バシッイイッッ

紗都子

「な——んですって!?!?!」

梨花

「……………」

右手をボールへ伸ばし後ろへ引きながらをキャッチ!

「さてと、

これは誰の仕業かな?」

ボールを弄りながら教室を見渡すと紐を未だに持った梨花にも視線を向ける

梨花

「ぼ、ボクが……」

カタカタと震える紗都子の代わりに圭一ではない彼に手を挙げる梨花ちゃん

「…嘘だな!

けど友達思いだね、」

梨花の頭を撫でて振り返り
震える紗都子の机に向かう

紗都子

「ヒッ、

あうーわたツくし…」

「…君だよな？」

沙都子を見据えて
左手を振り上げる

紗都子

「ッ違いますのよ！！圭いー
友達と勘違いして…ん、
だから…だから…そのー
ごめんなさいですわ、」

目を瞑り必死に頭を両手で
庇う紗都子に優しく触れる
それは彼の左手だった

「よく謝れたね！ええと、
お名前は？何ちゃん？」

紗都子

「さッ紗都子と言いますわ

あなたは？」

秘名

「本日付けできみのクラス
メイトになる霞神秘名、
よろしく紗都子ちゃん」

こちらこそと握手を交わす
沙都子と秘名の二人

梨花

「ボクを、
忘れないで…みー、」

ガラーピシャンツ

圭一

「紗都子ツオオオ今日こそ
覚悟しやがれえい！！！！」

思いつ切りドアを開け教室
に飛び込む圭一と和やかに
談笑する三人

魅音

「あれえ？」

今日だっけか、」

レナ

「はうう女の子!!!」

飛び込んだまま固まる圭一
と一人納得する魅音と失礼
な勘違いをするレナちゃん

秘名

「いや男だけでも、」

レナ

「そうなの?」

魅音

「いやあ名前だけじゃ
どっちか分かんないね」

男にしては少し長めの髪に
整った顔立ちがレナに女の
子と思わせたのだろう

ガララッ

知恵先生

「はい皆さん今日は
転校生がーあら?」

秘名

「間違えて教室にハハッ」

先生と教室に行く筈が先に職員室が分からずに開けた部屋が皆の教室だったのだ

秘名

「東京から越してきた、霞神秘名です1ヶ月後に妹も転校するんで仲良くしてください…以上、」

そして、お昼休み

魅音

「ささ、机引っ付けて早く早く秘名も！！！！」

疑問に思いながらも魅音達と机を引っ付ける秘名

レナ

「秘名くん、

レナはお腹空いたよ!!」

紗都子

「私もすわ!」

梨花

「みー」

何と無く理解したが

少し戸惑う秘名

圭一

「これが雛見沢だ

すぐに慣れるさ」

すぐには無理だと心の中
で思う秘名だが妹も仲良く
できそうだと安心した

第一章 突通し編 2

突通し編 2

仲良くお弁当タイム

圭一

「美味いッレナ!!
将来の旦那様が
羨まし過ぎる!!!」

レナ

「は、はうう…しし将来の
だ、だん、だ旦那様?!?!?
圭一くん!!そそ、それは
誰なのかな、かな?」

秘名

「…………、いつも
あんな感じなの?」

レナのうぶ乙女モードに
若干引き気味の秘名

梨花

「…にぱ〜」

紗都子

「悪い人ではないのですけど…」

魅音

「レナはつかずるいよ、」

おやあ？と魅音を見つめる
三人…わかる分かるよ

秘名

「んな事はどうでもいい
弁当ありがとう」

分校が弁当持参の事を知らず困っていた彼に梨花達は自分達のお弁当を分けてあげていた、いつもみんなの弁当を食べ合うから変わらないそうだ…優しいね

魅音

「チツーねえ妹って
どんな子なの？」

秘名

「梨花ちゃん紗都子ちゃん
より一つ下だよ、」

舌打ちはスルー！

紗都子

「じゃあ、ねーねーと
呼ばせますわ！！！！」

梨花

「綿流しは
見れないのです……」

秘名

「綿流し……
ああ！見れないね」

梨花

「え？………」

綿流しなんて雖見沢ぐらい
しか分からない単語を理解
した彼を静かに見つめる――
彼は魅音達と楽しくお喋り
に花を咲かせていて紗都子
も懐いている

紗都子

「梨花？気分でも
悪いんでございますか」

考え事をしていた梨花の目の前に紗都子の顔が現れる

梨花

「みー、大丈夫ですよ、」

紗都子

「なら、

よろしいですわ!」

すぐに圭一のから揚げを摘み口に運ぶ既に圭一とレナのお弁当は空だー気付け!!

秘名

「紗都子ちゃん、

野菜もお食べ!!!!」

魅音の弁当のカットトマトを紗都子の口へ持っていく

紗都子

「もう、お腹一杯ですから

ご遠慮しますわ!!!!」

秘名

「だーめッほら、

お口開けて!アーン、」

紗都子

「むう、アッアーン」

パクツモグモグ…うええッ

魅音

「（間接キスだ！？！？）」

圭一

「（あまりに自然だ！？！？）」

梨花

「（やるわね！）」

レナ

「はうゝ私の旦那様」

……………何も言えねえ……………

そして放課後

魅音

「諸君の是非を
問いたい！！！！！」

紗都子

「私は賛成ですわ！」

レナ

「レナも

いいかな！かな！！」

梨花

「秘名は一緒ですか？」

圭一と秘名を置いて

話は続くのだよ

魅音

「我が部活動の入部試験を
二人に受けてもらおう！！
覚悟はいいかな？」

圭一

「ちよつと、いいか？」

くっ付けた机から挙手する

圭一

「その部活動はなんだ？
試験は強制か？」

うんうんと秘名も頷く

コイツらは何を言ってるの
顔で魅音達は見つめる

梨花

「つまりゲームや遊びで楽しく愉快な事をする部で魅いは圭一と秘名二人に入って欲しいですよ」

にぱ　と説明してくれる
梨花ちゃんおっ持ち帰りの

圭一

「悪いが俺は暇じゃない」

キザに額に手を当てて横を
向く圭一： K O O Lだ

レナ

「圭一くん、レナと一緒に遊びたいな！！たいな！！」

うるうるとした瞳で圭一の
袖を掴む

圭一

「よし！！試験でも試練でも受けて立つぜええい！！」

分かりやすいな、圭一

秘名

「具体的に試験は
何をするのかな？」

魅音

「何をするって、
…やだ秘名’’」

手で顔を隠してもじもじ…

紗都子

「???…?」

レナ

「何って何って
なんだろう？」

(。D) 顔の紗都子と
絶対に理解してるレナ

秘名

「帰っていいか？
飯作らないと、」

呆れ半分怒り半分で鞆を掴
む秘名…正しい反応ですよ

魅音

「わああ！？！？おじさんが
悪かったよー！！！！」

秘名の背中に追い縋る魅音

秘名

「ちゃっちやと
始めてくれ、」

圭一

「ハートのAはこれだぜ！！
魅い音おおおん！！！！」

みんな

「な”なんだってええええ
！！！！！！！！！！」

ピカッアアアアアアン

タイムンジジ抜き勝負で

見事勝利を掴む

魅音

「いやぁ流石だよ!!」

圭ちゃん、見込みどうり
やるねえ! くつくく!!」

紗都子

「圭ーさん何故ジョーカー
が分かつたんですの?」

圭ー

「ジョーカーは二枚入って
るだろ、そしてその一枚だ
け傷が少ないジジ抜きじゃ
二枚も要らないからな!!」

梨花

「すごいのですよー!!!!!!」

紗都子

「私には及びませんわ!!」

因みに魅音のお情けは

言うまでもないな

魅音

「次は」

秘名だよーヒッヒッ」

今度もしつかりとハートの
Aとジョーカーを一枚だけ
持って秘名の前に裏返しに
確かに置いた

しかし圭一との勝負を見て
いた秘名はカードの裏が何
か分かっているにも関わら
ずに敢えて同じ…勝負

秘名

「…………へえ、」

不敵に笑う秘名と同じく

笑う魅音…怖い

秘名

「園崎…二者択一だけでも
違うんだよな？これ」

魅音

「さあね、」

取り巻き四人は理解不能だ

秘名

「ハートのAはここだよ」

魅音

「ッ！？秘名！！」

徐に立ち上がり魅音に顔を
近付け長い髪を手で優しく
触る

秘名

「ほら出てきた!!」

魅音の耳に囁きながら

カードを見せ付ける!?

みんな

「おおおお!!!!!!」

魅音

「な”なんで!?確かに
机に置いたのに!!!!」

慌てて机のカードを確かめ
るが…クラブの5

魅音

「秘名!? あんた!!!!」

秘名

「勝ちば勝ちだろ?」

梨花

「まさか魅いの注意をカー
ドから自分に逸らしてすり

替えるなんて部活メンバーもびつくり仰天なのです」

圭一

「梨花ちゃん解説ご苦労、でもさ勝ちでいいのか？
園崎魅音！！！！！」

魅音

「完敗だよ、私がしつかり
手で持ってたら本当に…
二者択一だったのに不覚
部長としての驕りだよ」

流石にそこまで圭一と同じ
だとまずいと思った魅音の
策は裏目に出してしまった…

魅音

「二人を部活メンバーに
入れていいかな？」

みんな

「もっちゃん！！！！！」

彼の転校初日は楽しく終る

そして明日思いがけない人
と出会っ事をまだ知らない

カナカナカナカナカナカナ
カナカナカナカナカナカナ
カナカナカナカナカナカナ

ああ
蝸がうるさい

カナカナカナカナカナカナ
カナカナカナカナカナカナ
カナカナカナカナカナカナ

第一章 突通し編 3

突通し編 3

朝日が大地を照らし小鳥達が囀る小気味よい包丁とまな板が奏でる食欲をそそるメロディにお鍋が合いの手をいれる…霞神家の朝食はご飯に味噌汁、塩鮭に白菜の漬物、納豆に目玉焼きにほうれん草のお浸し…すげ

秘名

「いただきます、—
ごちそうさまでした」

え？食べるの早過ぎだつてそれは—ほらあれだよあれ

家の戸締まりをして分校へ歩を進める清々しい朝の空気を深呼吸で肺に取り込む

秘名

「…お隣りさんは、
どこだよ雛見沢！！！！」

見渡す限り自分家だけしか

見えない…お隣りさんまで
5分以上はざらだ

暫く歩くと見覚えのある長
いポニーテールがひらひら
揺れる…いやふらふらか？
そつと顔を覗き込むと眠そ
うな魅音と目が合った

魅音

「あつれえ…美少女が
見えるよう〜？」

ゴンッ

痛ツたい！？ふえ秘いちゃん
どしたのつてか頭痛い！？！？
ん？なんで怒つてんの！？！？

秘名

「髪か？髪が長いからか？
こつちに来てから女の子に
間違われる回数が上がった
気がする…髪切ろうかな」

髪を弄りながら溜息する…

魅音

「だめだめ！！それは
武器だよッ武器！！！！！！」

ガシツと秘名の肩を掴み
唾を飛ばす魅音

まあ野郎ならブン殴るが綺麗な女の子の唾だか…コホ

秘名

「武器つて…必要か？」

魅音

「当〇り〇田の
クラッカー！！！！！！」

秘名

「合ってんのか？年とか」

魅音

「さあ？」

そんな事を話しながら
分校に到着…あれね？

秘名

「園崎や、竜宮達と
待ち合わせしてんじや
ないかいのう？」

魅音

「いやいや霞神さんや、

寝坊したから先に行つて
もらつたんじゃよ!!」

秘名

「ほつかほかーで、
待ッてえい!!!!」

オーバーリアクションで
魅音にツツコミをいれる

魅音

「!?!?ケホ、どつたの？」

秘名

「おかしいー
俺が遅刻する筈が、」

知恵先生

「あら?園崎さん霞神くん
お早いですね、」

秘名

「目覚ましは鳴つたのか?
ズレてんじやないか？」

魅音

「あ、あつれえ???」

秘名

「まあ取り敢えず、

知恵先生おはよう

「ございます！……！」

魅音

「うう」おはよう

「ございます、知恵先生」

知恵先生

「お二人とも

おはようございます！！」

朝の爽やかな挨拶を交わし

教室へ向かう

秘名

「これは――入るべきか？」

教室の戸を差して尋ねる

魅音

「……リベンジか、それが

昨日東京から帰ってきた

圭ちゃんへのトラップか

さてはてどっちかな？」

戸には押しピン、黒板消し
更にバケツ…あからさまだ
確実にミスリード…だ

魅音

「沙都子！おじさん達は
入っていいかい？」

沙都子

「あら！？魅音さん？
お早いですわね、どうぞ
窓から入って下さいまし
――！？！？秘名さん…、」

廊下側の窓から魅音と一緒
に教室に入ってきた秘名に
明らかに動揺する沙都子？

秘名

「ん？沙都子ちゃん、
顔赤いよ大丈夫？」

沙都子

「へ、平気でしてよ〃〃
おはようですわ！！！！」

おやおやと顔を見合わせる

魅音と梨花ちゃん

魅音

「（これは、
もしかしたら…）」

梨花

「（もしかするかもです！？
沙都子に春が来たのです
面白くなりますです）」

沙都子

「魅音さん！！りっか！！！！！！
聞こえてますわよ！！！！！！」

プンスカと腰に手を当てる
沙都子おっ持ち帰りいいい

圭一

「盛り上がってるなあ！？
魅音、どうしたんだ？」

レナ

「はうう、
気になるかな、かな！？」

魅音

「あッ！圭ちゃんレナ！！
聞いて聞いてよ！！！！！！
実は沙都子がさあ…」

ガッン…ドサ―

沙都子

「あらあら魅音さん！？

そんなところで寝たら

風邪を引きますわよ？」

たらいが魅音の脳天に直撃
して床に突っ伏してしまう

秘名

「…どこに盥を

隠してたんだ？」

梨花

「沙都子居るとこトラップ
在りなですよ！！！！」

にぱ〜

そして朝の会まで倒れてた

魅音委員長…空気嫁！！

知恵先生

「はい皆さん！

また転校生ですよ！！！！」

昨日の今日でまた転校生！？
当然ざわつく教室―そして

秘芽

「かひゃ」霞神秘芽です

―あッひいにい！！！！

来ちゃった””””」

秘名に似た可愛いツイ
ンテールの小さな女の子に
教室の低学年男子が悶える
勿論女子は冷やややかな視線
をアホな男子達に送る

当の秘名は頭を抱えて妹を
見つめるが秘芽は顔を赤く
して手を振る

時は進みランチタイム

秘名

「秘芽、

連絡ぐらいしろよ、」

秘芽

「ひいにいが私を

置いてくのが悪い！！！！」

梨花

「みい、秘名？ボク達に

説明して欲しいのです」

昨日同様に机をくっ付けて
お弁当を広げる梨花達と自
分の弁当を妹にあげる秘名

秘名

「つまりだな、」

秘名が言うには本来なら昨
日じいちゃんばあちゃんと
一緒に自分達も越してくる
筈がじいちゃんの仕事の都
合が付かず、なら先に自分
だけ雛見沢にきて家の掃除
やらを片付けておいて妹は
一ヶ月後にじいちゃん達と
一緒にやって来る筈が実家
のタンスからお金を拝借し
てタクシーで来てしまった
らしいのですよ…疲れたわ

圭一

「梨花ちゃん、
具合悪いのか？」

梨花

「気のせいですよ、みい」

魅音

「しっかし凄い行動力だね
秘芽ちゃんは…」

秘芽

「ひいにいと私は一緒に
いないとダメなんです！！
絶対に……ね！」

秘名

「……………」

ブラコン気味の妹に

苦勞してる秘名

沙都子

「私の事はねーねーと
お呼びくださいまし」

秘芽

「なんで、」

にここに話し掛けた沙都子
にピシヤリと返す秘芽

レナ

「秘芽ちゃん？
気に障ったのかな？」

秘芽

「別に、」

険悪な空気のまま放課後へ

魅音

「さあ！！部活を――で、
秘いちゃん？」

鞆を持ち秘芽と教室を出よ
うとする秘名を呼び止める

秘名

「悪い、家を片付けないと
それと――」

秘芽

「馴れ馴れしくひいにいを
秘いちゃんって呼ばないで

くれますか！！！！」

啞然とする魅音

沙都子

「ちよつと貴女は
何なんですの！！！！」

睨みつける沙都子と涼しい
顔でそっぽを向く秘芽

男の圭一は女同士の喧嘩？
に入れないでいる

レナ

「沙都子ちゃん魅いちゃん
が秘芽ちゃんの気に障る事
をしたなら謝るよ、でもね
分からないの、理由を…教
えてくれるかな、かな？」

レナの強い眼差しに

僅かに怯む秘芽

秘芽

「うるさいなあ、ひいにい
は私のお兄ちゃんなの！
オマエ等にやるものか！！
ウワアアアアア！！！！」

レナ

「――?!?!?」

突然レナにつかみ掛かろう
と走り出す秘芽だが…

秘芽

「ガ―ぐっ!?!?、」

秘名が秘芽の後ろ襟を掴み
首が絞まった彼女は仰け反
り彼に組み伏せられる

秘名

「悪い…根は優しい子だ
少し疲れてるんだろ?
一日中タクシーの中は
きついよな?」

前半はレナ達に後半は
秘芽に問い掛ける

秘芽

「―ごめんなさい、
みんなもごめんね、」

組み伏せられたまま謝る秘
芽に流石に何も言えない皆

秘名

「秘芽を家で休ませるわ
だから部活はパスな、」

秘芽を立ち上がらせて服に
付いた埃を丁寧叩く

魅音

「私も沙都子も気に
してないからさ、」

レナ

「明日は一緒に
遊ぼうね 秘芽ちゃん」

教室を出ていく秘芽は僅か
に微笑んだ…

TIPS 推察を入手

第一章 突通し編 3（後書き）

TIPS 推察

魅音

「秘芽ちゃん大丈夫かな」

レナ

「平気だよ、秘名くんが
付いてるから、」

魅音

「凄かったよね、」

レナ

「たぶん、お兄ちゃんが
レナ達に取られるって
思ったんだよ、」

魅音

「沙都子のねーねー発言は
まさに危険ワードだった
訳だね、」

レナ

「明日は謝ろうね、
魅いちゃん！」

魅音

「誤解を解かなきゃだね」

レナ

「沙都子ちゃんに
知らせないと、」

魅音

「おじさんが連絡するよ」

けどさ——のあれは、
おかしいよ

——はわからないよ

でも——は普通じゃないね
…あんな——は——
には無理——

あッ————が帰ってきた
電話切るね、

ガチャ…ツーツー

第一章 突通し編 4

突通し編 4

カチャカチャ黙々と朝食を口に運ぶ…二人に会話は無いが気まずい空気ではない

秘芽

「ごちそうさま、

美味しかったよ」

秘名

「お粗末でした、」

今日はバターを薄く塗ったトーストとベーコンエッグレタスとニンジンのサラダコーンスープに野菜と果物のミックスジュースだ

ピンポーン

秘芽

「お客さん？」

秘名

「いやそんな予定は無いけどな？」

んゝと首を傾げ人差し指をまだバターが付いた口許に当てて考える秘芽

秘名

「バター付いてる、」

ピツと親指でバターを拭いぺろと舐めながら玄関へと勿論秘芽は真っ赤かだ

秘名

「どちら様で？」

魅音

「あッ私、魅音！！！！」

レナ

「おはよう秘名くん！

レナだよ、」

秘名

「あーおはようーう！？」

玄関を開けようと取っ手に手を伸ばすと背後にピタと秘芽が張り付いた

まさか抱き着くとは思わず
少し裏声になりながら引き
剥がして玄関を開ける

秘名

「よう園崎、竜宮…
どした？」

魅音

「昨日は…その…えと、」

魅いちちゃんはいざという
時に限って役に立たない

レナ

「秘芽ちゃん、ごめんね！
私達は秘名くんを、
取ったりしないから
安心して…ね？」

秘芽

「う…あう、
ごめんなさい」

よかった…秘名くんの側で
言ったのはまずかったかな
でもこれで…お友達だよね

魅音

「ーてなわけでき、一緒に
学校行こうよ？」

あつ最後のいいところは
取るんだから

秘芽ちゃんはチラッと秘名
くんを見てからにつこりと
笑った、はううかぁいいよ
でも我慢我慢、嫌われたら
嫌だ嫌だ嫌だ

秘名

「竜宮？大丈夫か、」

レナ

「へ！？ひひ秘名くん〃〃」

考え事をしてたら彼の顔が
目の前に！？すつごく驚いた
圭一くんでもないよ
妹がいるとこんな感じなの
かな？かな？

魅音

「レナ？遅刻するよ！
圭ちゃん待つてる！！！！」

レナ

「ごめんね、ごめんね、」

なんだか恥ずかしくて私は
待ち合わせ場所の水車小屋
にダッシュ！！後ろから魅い
ちゃん達が追い掛けてくる

彼はともかく秘芽ちゃんも
私達の全力疾走に付いて来
れたのには驚いた

カランカランカランカラン

チャイム代わりのベルが鳴
り響き、私は今日一日を楽
しく過ごす為の努力を
決して惜しまない

レナ

「はうはう！？ずぶ濡れの
圭一ちゃんと魅いちゃん…
かぁいい！！かぁいい！！
おっ持ち帰りいい！！」

何時もの様にトラップに引

つ掛かる圭一くと巻き込まれた魅いちちゃん、高笑いする沙都子ちゃんに二人の頭をよしよしなでなでする梨花ちゃん…秘名くんは呆れて秘芽ちゃんはクスツと笑っている…幸せ…幸福だ

魅音

「…足音！？先生だ、片付けるよ！みんな！！」

魅いちちゃんが号令を掛けるとクラス全員でトラップを

綺麗サツパリに後始末

綺麗になる事は素晴らしいうん、全部綺麗に…汚れは取り除かなければいけない

今日の部活は何かな…かな

え？中止…役に立たないな

ダメだ駄目だ！！魅いちちゃんは悪くない…そうだ！宝の山に行こう、かぁいい物が見付かるといいな はうう

秘芽

「ひいにい、夕食は
何がいいかな？」

秘名

「ん？……！
鯖の味噌煮かな、」

秘芽

「私、がんばるね！！」

へえ、秘芽ちゃんも料理が
できるんだ！？

秘名

「ただ、その前に
昼飯だな、」

そうだ！二人を誘おうかな
レナのお気に入りの場所を
知ってほしいかな！かな！！

魅音

「バイトに遅れるから、
——ごめんね——！！！！」

圭一

「俺も母さんにお使いを
頼まれてるからさ、」

「じゃあな！！！！」

二人は急いで校門へと走る

梨花

「みい…沙都子、

帰りましょうです、」

沙都子

「ですわね、」

梨花ちゃん沙都子ちゃんもとぼとぼと教室を出ていく

レナ

「秘名くん秘芽ちゃん、
ちよつといいかな？」

私が宝の山に誘ったら秘名くんは大事な用事があつたみたいだけど秘芽ちゃんが代わりに用事を済ますからレナねえに付き合いなよと言ってくれた…頼むから割るなよと注意してから秘名くんは私の誘いを了承した

よかった、お昼はレナ特製
お弁当を二人に作って

あげよう 用事も一時間も
したら終るみたいだからね

でも割るなよ？ 気になるな

まだ引越しの片付けが

残ってるのかな？

悪い事…したかな？ かな？

帰り道の途中で秘芽ちゃん
と別れて宝の山に向かった

…家には居たくない…

今日は、かぁいい物が

きつと見付かる気がするよ

きつと大丈夫…心配性だね
まさか…レナを——は
ないよね？——…

もし——なら？……いや
その前に自分の手で…

汚れを落とすんだ

カナカナカナカナカナカナ
カナカナカナカナカナカナ

うるさい…かな…

カナカナカナカナカナカナ
カナカナカナカナカナカナ

第一章 突通し編 5

突通し編 5

ガサガサッゴソゴソッ

レナ

「かぁいい物は

見付かったかな？」

私が新しくできた山に上半身を突っ込んで金属の板やら劣化したプラスチックに……うわ！？生ゴミまで引きずり出して黙々と働く秘名くん……掃除屋さんになればいいと思うな！はうあれ？どうして私が近づくと一歩……下がるのかな？折角急いでお弁当作ったのにな、アイツはいなかったほつとした……家が臭い臭いアイツの——でコンロを掃除したけど余計に汚れてしまった、やはりばい菌なんだアイツは……綺麗に……

秘名

「取り敢えず鉈を下ろせ」

レナ

「あッごめんね？」

いけない、いけない！！最近
ぼーっとする事が多い気がする……
アイツが家に上がるからだ！！ああ汚わらしい！！

秘名

「疲れてるのか？今朝から
隈が出てたしさ、」

レナ

「あはは！！！！
大丈夫なんだよ、だよ」

よく揉んだのに気付かれて
いた！？……得体が知れな……！
私は何を考えてるんだろ！？
大事な友達を……トモダチ？

秘芽

「ひいにいいい！！！！
レナねえお待た……せ？」

秘名

「お疲れーって、どした？
わなわなしてさ、」

秘芽

「ききックスウウ！?!?!?
ダメダメダメっえええ」

私が思考の渦に吞まれていると耳を劈く悲鳴が聞こえて気が付くと私と秘名くんは地面に手を着いていた…

秘芽

「ひいにい！！！！
きキスなんて早いよ！？」

秘名

「はい、するか?!?!」

レナ

「はうう！？秘芽ちゃん、
誰と誰がなんだろう？」

秘芽ちゃんは秘名くんの首根っこを掴んで振り回したかと思うと今度は顔を徐々に近づけていく

秘名

「！？やめろ！！

止せて！！！！」

秘芽

「初めては私と」

ピッカカアアアアーーン

なんとか誤解を説いた私と
秘名くんは秘芽ちゃんと一
緒に三人並んで特製弁当に
舌鼓しながら明日の約束を
取り付けるー秘芽ちゃんの
右頬が赤いのは私のせいだ

それから2時間程宝探しを

して二人と別れた

家に着いた…まだ帰ってき
てない…仕事を搜してる…
レナの為に…頑張っ…

いい加減に猫かぶりをする
のはやめたら？レナ―

私は気付いて……しまった
何に？ああ目を逸らすな！！

夕飯の準備を始める私に電
話が鳴り響く

レナ

「うんわかった！！
………気をつけて、」

ガッちゃん

自分でも驚く程強く受話器
を叩き付けていた

ボトツ　ボトボト

ズチャ　バシャア

愛情を込めた食事を流しに
捨てる…帰らない…違う！！

帰してもらえないだけ

一人で家にいるのは堪えら
れない…アイツが

グシャ　グジャ

グチュ　ブリュ

ハンバーグを手で握り潰す

少し気分が良くなるがすぐ
にふつつと沸き上がる感
情―やけに蚊が多いな

さつきから首筋が痒い

そうだ！魅いちゃんに

電話をしないと…

ポリポリ ポリポリッ

クリームを後で塗らなきゃ

魅音

「はい、園崎です…

ご用件を…」

レナ

「レナだよ！

今、大丈夫かな？」

魅音

「なあんだ、どしたの？」

レナ

「明日なんだけどね！—

魅音

「分かったよ、圭ちゃんに
聞いてみるからね、」

レナ

「よろしく、

なんだよ！だよ！！」

ガチャン…ツーツー

TIPS 土曜父の電話を入手

第一章 突通し編 5（後書き）

TIPS 土曜父の電話

保典

「礼奈か？夕飯は知り合い
の所で食べるから」

レナ

「いつ頃帰るの？」

保典

「今日は泊めて
もらうから…」

レナ

「…仕事は見付かった？」

保典

「…ごめんーねえ、いつ
まで電話してるの？—
ああ！！それじゃあな」

レナ

「うんわかった！！
………気をつけて、」

ガチャンツーツー

「ふふ!!!!!!」

聞こえたかしらね？」

保典

「こ、困るよ……」

第一章 突通し編 6

カナカナカナカナカナカナ

「んしょ、ふッハア…しょ
もう少し…あと少し…」

カナカナカナカナカナカナ

突通し編 6

秘名

「長げー階段、」

秘芽

「うん長いね！」

行きますか？と古手神社へ
と一段ずつ上つていく二人

圭一

「なあ魅音、あれは
何だろうか？」

魅音

「たぶん、
お弁当じゃない？」

二人が見つめる先にベレー
帽を被って両手が痛々しく
食い込むボストンバッグを
持ったレナが涼しい顔で鼻
歌なんかを口ずさみこちら
に歩いてくる

レナ

「魅いちゃん！圭一くん！！
おっはよー！！！！！！」

水車小屋の前で待っていた
二人に私は右手を振るが鞆

の重さに一瞬ふらつき慌てて両手で持ち直す危なかつた。圭一さんと魅いちゃんは私を見て苦笑いしてる…

圭一

「5キロだな！」

魅音

「いや8キロだね！！」

レナ

「何の話だろ、だろ？」

私が聞いてもアハハ…と笑うだけの二人、ぷー！！

圭一

「レナ貸せよ、神社まで持ってやるからさ、」

魅音

「ポイント稼ぐねえ？」

圭一さん、」

からかい笑う魅いちゃんとうつせえなんて言いながら私の手から鞆を取って一瞬想像以上の重さに落としかけるが気合いを入れて肩に

掛け笑いごまかす圭一くん

レナ

「はう〃圭一くん〃

ありがとうなんだよ〃」

圭一

「ああー急ごうぜ!!」

二人が待ってる、」

魅音

「ッよーし!

出ッ発ッつ!!!!」

ズンズンとレナ達は神社に向かって進むー朝帰りしたお父さんから…嫌な匂いが

ああ臭い!!!!鼻が曲がる!!

憎い憎いッ憎い…

ヒタ

神聖な家を穢して!!今度はレナだけのあの場所までも土足で踏みにじるつもりだ

ヒタ…ヒタ…

ツツ―…!?!?

「レナ、どうした?」

「大丈夫かい?」

二人の私を心配した声が遠くに聞こえる…大丈夫だよ
そう返事をしながら後ろを注意深く見詰める…いない
誰も!?!―確かに足音が聞こえたのに…ヒタヒタ

ついて来る…

ああそうか!!レナを護る為にオヤシロ様がついて来てくれたんだ!!!!私は加護を受けているんだ!!

心強いよ…ありがとう

ヒタ…ヒタ…ヒタ…ヒタ…

古手神社境内

レナ特製超かぁいい弁当を
魅いちゃんに圭くん、秘
名くんと秘芽ちゃんと一緒
にシートを敷いていざ食べ
ようとお箸を握った時

沙都子

「あら皆さん、
お揃いで何事ですよ!？」

梨花

「み〜!? 沙都子だけ
仲間外れなのです!!
なでなで〜にぱ〜」

ちゃっかりと圭くんの隣
にいつの間にか座っていた
梨花ちゃん…はうはう””
さ沙都子ちゃん!?!? そんな
瞳で…はううう””””

おッ持ち 帰えりいいい

沙都子

「嫌いやああ、助けて
下さいまし〜!?!?」

レナ

「ハアハア大丈夫レナが
優しくするからね」
沙都子ちゃんは大人しく
レナのはう…アじゆる」

かぁいいかぁいいかぁいい
はあ…頂きます”じゆるり

沙都子

「ヒイツツ、レナさん!?!?」
許して下さいまし〜!」

動かないでね 沙都…子—

ピカアアアアアア—ン

秘芽

「おイタが過ぎるよ、
レナねえ！！！！」

何が起きたのか分からない
私は仰向けに晴天を眺めて
いた…秘芽ちゃん…凄いね

みんな

「（かぁいいモードのレナ
を一撃で！？レナぱん並の
精密さと物理法則を無視
…秘芽ちゃん―貴女は…
なんて恐ろしい娘！！）」

沙都子

「秘芽く感謝ですわ！！！！」

圭一

「すげえな！？驚いたぜ！！」

魅音

「いやいやレナを超える
逸材がこんな近くに！？」

秘名

「よくやったな、」

秘芽

「エヘッ」「」

私は照れながらも誇らしげに胸を張る秘芽ちゃんから目を逸らし一人その輪に加わらずにぼーっと宙を眺める梨花ちゃんが気になつてわっ！！と声をかけてみた

梨花

「みい！？！？――レナ？
びつくりしたのです。」

レナ

「梨花ちゃん、
元気ないね？」

私が尋ねると梨花ちゃんは

梨花

「――元気がないのは
貴女でしょ？」

レナ
「……ッ……」

なんだ！？これは…

梨花

「かあいそうな…レナ、」

クスクスと笑うコイツは

何者だ！？！？

梨花

「みいレナ、

大丈夫ですか？」

レナ

「……梨花ちゃん！？」

なんだ！？あれは幻か？

………

まただ、視線を感じる

梨花

「食べないのなら
ボクが頂きなですよ？」

ふと意識を戻すとみんなは
私のお弁当を美味しそうに
食べていて梨花ちゃんがタ
コさんウィンナーを箸で摘
み顔を覗き込んでいた

レナ

「……いいよ、
梨花ちゃんが食べて」

梨花

「み〜パクっ」

もぐもぐーゴクン…には〜

ああ梨花ちゃんだ、きつと
私は疲れていただけなんだ

そうに違いない!!

その後、圭一くん秘名くん
秘芽ちゃんに雛見沢の町と
興宮をレナと魅いちゃんと
で案内した梨花ちゃん沙都
子ちゃんも手伝ってくれた

その間も足音はついて来た

一歩だけ…遅れて

また明日、学校で！！！！

その別れの挨拶で私達は

それぞれの帰路に着いた

玄関を開けて閉める、靴を
揃えて脱ぎレナの部屋に向
かう…アイツはいない

だけど…お父さんもない

ヒタヒタ…ペタペタ…

ヒタヒタ…ペタペタ…

チリン…チリンチリン

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

ひぐらしがなく…五月蠅い

かゆいカユイ痒い

ガリガリ…ボリボリ…

明日の放課後に診療所に…
行ってみよう

あッ
血が
……

第一章 突通し編 7

突通し編 7

園崎家…雛見沢御三家とか
言う仰々しい肩書きが売り
かどうかは知らないが

まあなんだ…でかいな〜と

秘芽

「資産いくらかな あつち
の山も魅いねえの土地！？
逆玉か〜憧れるね〜」

秘名

「いや憧れるのは
男じゃねえか？」

至極冷静にツツコミを入れ
る秘名と瞳をキラキラ輝か
せる秘芽の二人は園崎本家
の巨大な表玄関の前で我が
部の部長を待つて既に5分

ガチャン…ギギイ…イ

魅音

「いやいや、」

「ごめんごめん!!」

顔の前で手を合わせて頭を下げる魅音に徐に手を伸ばし跳ねた髪を梳くつてあげる秘名と彼女のスカートを握って妹にしてくださいと円らな瞳で奥義上目遣いを

繰り出す秘芽

魅音

「ふえ!? 秘いちゃん」

秘芽ちゃん!?!?!!!!

お、おじさん!!!!

あたあたふたふたするだけの魅音：かぁいよいよ!!

秘名

「よし、遅刻するぞ?」

秘芽

「レッツらゴー!!!!!!」

さくさくきりきり進んでいく二人に我に返った魅音は二人とも酷いよ!?!?待って!?!と叫びながら走り出した――

カランカランカランカラン

みんな

「ぎりぎり、

セーーーーフ!!!!!!」

なんとかチャイム前に席に着いた五人にやれやれと肩を竦める知恵先生

因みにトラップだが知恵先生が先に教室にやって来たので発動前に沙都子と梨花ちゃんがしっかり撤去した

沙都子

「トラップの回避にこんな方法があるなんてえ!?!」

梨花

「どんまいなのですよ！！」

次は圭一だけが確実に

引っ掛かる罫を仕掛ける

のですよ、沙都子！！！！」

ええ私、挫けませんわ！！と
メラメラと闘志を燃やす！！
沙都子と、何故か魅音の頭
を撫でる梨花ちゃん、みい

知恵先生

「ハイハイ、

授業始めますよ！！！！」

パンパンと手を叩き教室の
空気を切り替える知恵先生
流石ですね！！！！！！

そして午後の授業は体育！！

武器は手にしたか？

弾薬は充分か？

別れは済んだか？

後戻りは出来ないぞ！！

己の身は己で護れ！！

よし…散ッ開イ！！

戦いの火蓋は

切って落とされた

『ガッこちらH1、

H2…聞こえるか？ザ』

『ザザッ感度良好！！目標を
視認したよ！！オーバー』

『ガッこちらも視認した！！
…仕掛けるぞ！！続け！！』

ダダダダダダッ

ビュッ　ビュシュユ

「キャアア！？！？」

「ぐわああ！？！？」

「お…お母さん、」

「奴だ…奴が来たんだ」

バタバタと戦場に花が散る

『ガッ使える物は全て奪え
命を無駄にするな！！』

『ゾ了解！！！！H1！？前方に
ACE級を確認！！！！』

『なに！？！く、視認した！！』

M4カービン！？厄介だな
園崎め…やってくれる』

魅音

「いひひ！！トランシーバー
なんかで連携してもさ…
おじさんには勝てないよ
秘いちゃん秘芽ちゃん？
大人しく手を上げな！！」

ガチャリとM4カービンを
（ただ強力な水鉄砲だけど）
二人に向けて構えた魅音！！

『ジ…こちらH1、

Pは持つてるな？H2』

『ガッうん、持つてるよ
タイミングはーだね？』

『ザッオーライだ！！！！』

魅音

「ツツ！？ハ！！

死にに来たか！！！！」

真っ向から突っ込んで来た
秘名に照準も合わせずに引
き金を引く魅音だが――

ビッシューーウウ

スウェーで横に躲した秘名の後ろからガムテープで銃口を塞いだ水鉄砲が魅音の足元に投げられ破裂！！

バシャツアア

魅音

「——ま負けた、」

ガクツと膝から崩れ落ちた魅音から強力水鉄砲を奪い再び阿鼻叫喚の校庭へ

駆けていく二人…

それから——僅か数分後

圭一対秘芽・レナ対秘名の戦いが繰り広げられた

邪魔をする者は誰もいない

圭一

「俺とレナの戦いに
介入するのか?!?!」

秘芽

「想いだけじゃ!!!!!!
勝てやしないよ!!!!」

レナ

「届かないから…
私はああ!!!!!!」

秘名

「直撃を避ける君に、
勝ちはずなあい!!」

ピカーーン

ドオoooooooo

ドオオオoooooooo

圭一・レナ・秘名・秘芽

「後悔はない！！！！！！
あるとすれば……！！！！
それは！！！！！！！！！！」

最高の舞台が終る事……

それだけだあああああああ

ピカッアアアアアアン

カランカランカランカラン

四人は動かない…動けない

ポタポタと雫が地へ落ちる

固唾を呑むクラスメート達

静かに四人へと歩む部長!!

この勝負!!!!!!部長…

園崎魅音が預からせて貰う

異論は…受け付けない

— 解ッッ散ああん!!

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナ

熱くなった身体を冷やす心地
地好い風を噛み締める四人

因みに放課後の部活は今回の
の体育が熾烈を極めた為に
中止―各自英気を養う様に
とは部長・園崎魅音の談！！

未だに体育兼部活の余韻が
覚めないのかここをああす
ればあそこをああしてれば
と身振り手振りで話す妹に
取り敢えず帰るぞと言って
鞆を掴んだ俺の前にふわり
とシャンプーの香りが漂い

振り向くと栗色の髪が目の
前に広がった

レナ

「あッ」あのね、圭くん
とも話したんだけどね、
ご褒美の罰ゲームはね…
「ごによごによなんだよ」
いいかな？かな？」

理由は分からないが俯き話
すレナに構わないけど、と
返す秘名と秘芽に安堵の溜
息を吐きじゃあねと別れの
挨拶をして教室を出ていく
彼女の様子に首を傾げ合う
二人…だった

TIPS 眼差しを入手

第一章 突通し編 7（後書き）

TIPS 眼差し

「やはり、

この——も——ね？」

.....

「そう、早過ぎるのよ……」

.....

「——は、

——かしらね？」

.....

「わかってる、

イライラさせないで——！」

.....

「——までは、

諦めないと思うわ！」

.....

「ひるろこ——！——！——！」

——が不味くなる!!」

「——を助きたい……」

……—……

第一章 突通し編 8

突通し編 8

みんなと居ると楽しいよ…

でもね、最近は霽が掛かる

「アレルギーでしょうね」

「一週間程、様子を見て、
治らないようでしたら
もう一度来て下さい」

塗り薬を渡され朝と寝る前
に患部に塗るようにと言わ
れた…とてもいい先生だよ

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

今日は楽しかったな…ふふ
圭くんは魅力ちゃんの期
待通りの活躍だし秘名くん
と秘芽ちゃんも凄いいよ！！

ああみんなと一緒に居たい

“早く明日になあれ”

レナ…レナ！！また私に全部
任せて自分は楽しく過ごす
つもりなんだ…嫌な子だ！！

違う！？違うよ！！！！

ヒタヒタ…ペタペタ…

嘘だよ…嘘嘘…嘘つき！！

レナは嫌な子…いを取った
から良い事も要らないよね

あはは…アッハハハッハハ

レナは要らない子嫌な子！！

違う…違うんだよ！！

アッハハハアハハッアハハ

アッハハハハハハハハハッ

レナ

「うわあああ!?

ごめんなさい!?!?」

レナだけの秘密の場所で私は目を覚ました…体を気持ち悪い汗が伝う…痒い

レナ

「ハア…うう、

お風呂入りたい…、」

私は仕方なく家へと帰った

保典

「礼奈!?こんな時間まで、何処に行ってたんだ!」

バシッと頬を叩かれた

レナ

「ッッ…——、」

私は謝る筈だっただけ
レナは…お父さんを睨んで
だから再び同じ頬を叩かれ
涙がポロポロと零れていく
止めどなく溢れる雫を拭い
もせずにレナの部屋に駆け
込んだ私の耳に、お父さん
の怒鳴り声が聞こえる

.....

.....

レナ

「そこに居るの？」

.....

レナ

「どうすれば…幸せに？」

..... 消せばいい.....

なんだ凄く簡単な事だ

ネタは…拳がつている

なら話が早い！！！！謝ろう！！

レナ

「お父さん…ごめんなさい
本当にごめんなさい…」

すぐに許してくれた…男は
女に本当に弱い笑える程だ

後はお父さんの横にさも当
然に居座るコイツと明日の
約束を取り付けなければ…

幸い今日はもう帰るらしい
見送る振りをしてお父さん
に気付かれずに取り付けた

軽い軽い！！！！

ああ早く…明日になあれ

頭がその事で一杯で翌日は
絶不調…罰ゲームはレナが
全て受ける事に同情しても
助けはない…部活は非情だ

レナ

「はう…圭くん、
怖いんだよ！？だよ！？」

圭一

「レナ！！そこは、
ご主人様…だ！！！」

よく分からないんだよ
圭一くんの言う事は…

梨花

「みいレナ？ふぁいと！
おーなのですよ！！」

ありがとう梨花ちゃん

魅音

「レナが居ないとビリって
事を忘れないようにね…
圭ちゃん？くっくっく」

ドンマイ…圭一くん、

沙都子

「をゝほほほ！！！！」

不様ですこと！！！！！！」

もう一度ドンマイ圭一くん

秘名

「まだ部活続けるのか？」

時計を見る―6時を過ぎていた…いい加減抜けないと

秘芽

「お腹空いた〜！！」

魅音

「うーん、じゃあ解散！！

また明日ね！！！！！！」

秘芽ちゃん…感謝だよ

適当に理由を付けて残った私は机の中のソレを確かめ

もう一度決意を固めて

一路…宝の山へと

一歩ずつ確実に歩き始める

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

カナカナカナカナカナカナ

ひぐらしがいない

ヒタヒタ…ペタペタ…

大丈夫だから…レナ…

私が助けてあげるから

ワタシが助けてアゲルから

安シンして見てればイイヨ

レナはミテルだケデいいよ

第一章 突通し編 9

突通し編 9

ダム工事現場のゴミ山の中
にアイツは居た…

ふふバカな奴

気付かれずに背後に回って
ソレを持ち出すキラリと月
明かりに光り私の顔を映す

「礼奈ちゃん？どこ〜！！
―…チツ糞ガキがあ」

カラン

僅かな物音に振り向き醜い
顔を更に醜惡に歪めた

コイツの背目掛けてソレを

突き…刺した

ブジュ…ジュジ…

「あ”あ”…テメーざけ…
やがってええ…！！！！」

ツ、ギイヤ！？

まさか反撃を受けるなんて
思わなかったから鼻がグヂ
ツと嫌な音を立てて血が止
めどなく溢れてコイツに組
み伏せられてしまった

「とんだ糞ガキだったね！！
死ね死ね死ね死ね死ね」

万力の様に首を絞められて
どどん視界が朱く黒く…
霞んで…意識が遠退いて―

「あぐ！？いぎあい…げバツ
ぎゃぎぶび―あう…―

ぶツあ―はあっふ…ん？

「何してんだ？レナに…」

夢を見てるのかな？かな？

彼が刀を持って私とコイツ
を見下ろしている

僅かにも動かないコイツ…

「片付けるぞ…レナ」

気が付いたらコクコクと頷いてレナは鉋を何度も振り下ろしてコイツをバラバラに切断…用意していたゴミ袋に詰め込んで一先ずワゴン車の中に隠して服を着替え外に出ると彼は月を見上げていて私はその横顔に胸が跳ねたのが分かった

彼に家に帰るように言われ
私は帰路に着いた

お父さんはレナの顔を見て
凄く心配して私が足を滑らせてダム工事現場の山から
落ちたことを告げると宝探

しも程々にしなさいと注意
されただけで済んだ…

明日は部活には出れないな
生ゴミを始末しないと
言い訳は簡単だ…家の用事
それだけで良いんだから！！

木曜日までに終らせる

今日が火曜…実質…短いな
行動できるのは水曜日だけ
だが…短時間で事を済ま
ないと雛見沢は小さい何処
で誰が見てるか分からない

彼なら私を護ってくれる”

だからレナ…安心して

レナは私が護るからね

レナはミテルダケデイイヨ

ガリガリ…グチッグチッ…

………

カランカランカランカラン

翌日の放課後―レナは申し
訳なさ気に頭をみんなに下
げて足早にダム現場に直行

私はさっきまでは昨日の出来事は夢だったんじゃないかと考えもしたが決定的な事実が目の前で吐き気を催しそうな臭いを放っている

ワゴン車のドアを開けて肺一杯に新鮮な空気を取り込んで、もう一度ソレを見る

黒い小さなゴミ袋が七つ…
胴は大き過ぎた為、横半分に切断…随分と軽くなった

ふ、ふふ…堪えろレナ！！

やる事は残っているんだよ
一番肝心な処理がね…

昨日寝ずに考え出した

レナの秘密の場所は確かに安全だが雛見沢のみんなは私が此処でゴミを漁ってる事をよく知っているから論外だ…分校の裏山が一番近く滅多に人も近寄らない

そこまでは良かった…けど
それなりの深さの穴を七つ
も作る事は当然だが同じ所
に掘ったんじゃ意味がない

四つ作ったところでレナの
体力は限界を迎え私は舌打
ちをしてスコップを放って
地面に横たわった…森を抜
ける風が気持ちいい…

ガリガリ…くそッ

あああ…―痒い痒い！！

ドロリと血が首筋から流れ
それがまた痒みを引き起こ
して掻く血…掻く血…を繰
り返して右手を左手で押さ
える…ツツく…んんんうう

アア―だめ…はううーんツ

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

痒い痒い痒い痒い痒い痒い

穴だけでも作って置かなけ

れば首筋や肘、膝裏の痒みを紛らわす為にも穴掘りを再開…全部が完成した時には既にひぐらしもなき終り辺りは朱から闇に代わろうとしていた…疲労しきった身体に鞭を打って家を目指して足を動かす…ゴミは明日の罰ゲームが終ってから片付けよう―これ以上時間を掛けてはお父さんに怪しまれる…から…仕方ないね

ジッ…ジイジッ―…

家までの帰り道、周囲に全神経を張り巡らしていた私の足下に縮こまったひぐらしが一匹…必死に羽根を動かして足掻いていたが

―コロツと死んだ

.....

ウワァア、ヒィーアアアア

突然の時々感じていた誰かの視線に私は悲鳴をあげて
一気に家まで走り玄関の鍵
を掛ける

はッ…ハアハア、ヒュッ…

ハハッ！？落ち着きなよレナ

疑われる事はないんだよ！！

鉦もゴミ袋も持ってなかったし、血だって…―あれ？

なんで？

どう…して？

血が…血が…血が…血が…
血が…血が…血が…！？

いや…イヤ…嫌だ！？！？

レナは台所の流しに駆けて
何度も何度も手を

ゴシゴシ…ゴシゴシ…

バシャバシャバシャバシャ

落ちない落ちない落ちない
落ちない落ちない落ちない

アハハ…アッハハハハハハ

あれ？…もうこんな時間！？

夕飯を作らなきゃいけない

今日は…ハンバーグだよ…

ハンバーグ…

美味しい…ハンバーグだよ

お父さん…？

食べてくれなきゃ…レナは

嫌ッなんだよ…だよ…

第一章 突通し編 10

突通し編 10

エンジェルモート

料理は…そこそこののだが
デザートに関しては一級品
を提供するファミレス

しかし！！真の魅力は！！！！！！
ウェイトレスの制服にある

バニーとスク水とメイドと
小悪魔を足して4で割って
絶対領域は割り切れない
で構成された背中ぱっくり
何とも妖しく萌えもえ衣装
を身に纏った可憐な乙女達
がプライスレス スマイル
で優しく接客してくれる
パラダイスなのだああああ

圭一

「フハハハ！！実に快適だ
魅音、もう少し優しく

扇ぎたまえハハハッ」

魅音

「はハイ」

ご主人様…」

ヒラヒラ…そそそよ…

レナ

「ハアハア…沙都子ちゃん
アーンだよ、だよ」

沙都子

「くッ、レナさん！アーン
でございますわよ！！」

アア〜ン…パク ジュルリ

秘芽

「あッ梨花？

紅茶が切れてるよ！！」

梨花

「畏まりましたですよ！！」

「そろそろなのです。」

制服を着た魅音達は主一・レナ・秘名・秘芽を接客中

因みにだが…梨花ちゃんと沙都子は合う制服が無かったので本物のスク水にエンジェルモート制服のパーツをくっつけた反則級の衣装で接客中だ…梨花ちゃんはおぼこぼとカップに紅茶を注ぐ…かぁいいかぁいい”

秘名

「なんか変な気分だ…」

この異様な空間に秘名は軽く引いている

これは先日の水鉄砲決戦で勝ち残った四人へのご褒美兼魅音達の罰ゲームである

パク…モグモグ…コクコク

ペロペロ…はむはむ…ゴク

圭一

「魅音、今度は肩揉みでもして貰おうかな？」

魅音

「え？」仕方ないなあ…」

にぎにぎ えいえい”

圭一

「梨…花ちゃん、どうしたんだ？」

圭一の目の前でにぱーと笑う梨花はかなり不気味だ

梨花

「（圭一…魅いも女の子なのですよ…
じいじによ み〜）」

ぼそつと耳元で梨花が囁く
と圭一は狼狽える

んしょ〃んしょ〃圭ちゃん
気持ちいい？

圭一

「もういいから！！
ありがとう〃〃」

そう？なら良いけど…と肩
揉みを止めた魅音を名残惜
しそうに見つめる圭一

秘芽

「圭にいいサイター、」

秘名

「まあ確かにな…」

レナ

「なんの事だろ？だろ？」

沙都子

「梨花、圭一さんに何を
おっしゃったので
ございますこと？」

訳が分からない二人に梨花
ちゃんがオブラートに包ま
ずに教えると……

沙都子
「ふッ不潔ですわ」

レナ
「はうう」はうはう」！！
はううううう！！」

ピカピカピカアッアアン

エンジェルモート特製DX
パフェに顔を埋め撃沈した
圭一：梨花ちゃんは啞う

有象無象達

「雛見沢は…こんな少女に
永住だ！！永住するなり」

有象無象達

「僕にも

紅茶をによりん」

有象無象達

「私はこの持つてけ、
チェリ　パイ（夏）を
所望するであります」

有象無象達

「オイ！！そこのガキ！！！！
ウェイトレスに飽き足らず
女学生を三人も連れるなど
万死に値するぞ！！！！」

ん？…三…人も？

圭一

「…フン、負け犬どもが！！
ヒナちゃんは俺の物…
てめえ達には渡さん！」

ヒナちゃん？

有象無象達

「ヒナちゃんて言うんだ？
以後お見知り置きを！」

秘名

「は…はあ？」

次々に秘名の手を取っては

挨拶する有象無象

圭一

「ええい！！汚らしい！！
失せやがれ！！野郎ども！！
星に帰れえええ！！！！」

ゲシゲシと足で有象無象達
を秘名から遠ざける圭一…

有象無象達

「おのれ！？！？萌えが有る
限り我等は負けん！！」

パンパンッ

魅音

「傾聴ッ傾聴！！
聞きなッ野郎ども！！」

ドスを効かせながら店内を
見渡した魅音

魅音

「今から課外部活の
開始を宣言する！！！」

みんな

「なッなんだってええええ
！！！！！！！！！！」

ドオオオオーーーーン

ぢわぢわ... ぢわぢわ...

ぢわぢわ... ぢわぢわ...

いや、男なんだけど...

ドンマイなのですよ
みいゝ”にはゝ

TIPS 今日の服を入手

第一章 突通し編 10（後書き）

TIPS 今日の服

レナ

「この首は…」

見せられないな、」

クローゼットを開けて首の傷が隠せる服を探し始める

レナ

「うん、これに決めた!!」

タートルネックの黒いノー
スリーブを制服の代わりに

着てみた

レナ

「蚊に刺されたからって
言えば大丈夫……」

こんな時は自分が女の子で
良かったと思うよ

薬…無くなっちゃった

どうしようかな、かな

第一章 突通し編 11

突通し編 11

課外部活ルール説明

エンジェルモートメニュー

内のデザふえ限定及び新作
デザート&ドリンクの間食

時間制限無しお代わり自由

部活メンバー達は再度最初
からメニューを食べること
但し5分間の先行スタート
権が与えられる

勝利者に与えられるご褒美

部活メンバーは罰ゲームを
個別にメンバー達に下せる

他の参加者はメンバー達に
よる接客をプレゼントする

梨花

「秘名は只今諸事情により
お着替え中なのですよ
覚悟しやがれ、にぱ」

沙都子

「誰に話し掛けてるで
ございましょう？」

沙都子は知らなくて良いの

魅音

「1番先に間食した人が
唯一無二の勝者だから
――と、準備完了したね」

店員がワゴンにデザートを
乗せて天使の微笑みを振り
撒きながら参加者達が座る
テーブルの上にメニュー順
に手際よく綺麗に並べると
共にバッシングも忘れずに
施してテーブルが鏡の様に
光り輝く、その上に置かれ
たデザートが更に美味しく
見えるから不思議

秘芽

「あッひいに…」

「姫奈ねえ」

クロークから出てきた娘に
抱き着いた秘芽ちゃん

有象無象達

「おおお!?!?!萌え」

姫奈

「や…ここにやにゃちは」

もじもじとスカートを弄る
姫奈ちゃん先程の男っぽい
制服も良いがシックの中に
可愛らしさが溢れる今現在
着ているゴスロリチックな
姿はトマト×3の破壊力を
軽く越えているメロン×3

魅音

「それじゃ課外部活ッ
開始だよ!!!!!!」

圭一

「ゴふ、頭があア!？」

秘芽

「パクパクごくごく」

レナ

「ベロベロ パッケン」

アイス系の攻略に難航する
圭一は頭を抱えながら秘芽
を見るとアイスとドリンク
を交互に食している…ほら
冷たい物を食べて直ぐさま
飲み物を飲むと温く感じる
あの効果を利用して食を進
めていく…言うまでもなく
レナはかぁいいモード状態
で破竹の勢いで食べ進める
言わずもがなだが何故レナ
が『かぁいいモード』かは
目の前に姫奈ちゃんが座り
微笑みを浮かべているから

姫奈

「が」がんばれ」」」

有象無象達

「頑張ります!!!!!!」

有象無象達は姫奈がレナ達
部活メンバーを応援してる
にも拘わらず自分達に都合
よく受け取り頑張るのだが

有象無象達

「馬鹿な通常の3倍だと!?

えエンジェルモートの…

デザートは化け物か!?

有象無象達

「認めたくないものだな

自分自身の限界は…」

有象無象達

「この値段でこの量だと!?

嬉しい誤算だったな…」

儂く散る有象無象達

圭一

「こんなOSで勝てると?

貴方達は！！！！！！」

圭一は別にホットコーヒーを注文してアイス系を攻略してホール系に突入

梨花

「み〜」頑張るのです」

沙都子

「フレッフレ〜ですわ」

不参加の二人は応援係です

魅音

「連中が落ちるのは当然！
圭ちゃんもやるねえ」

調理場からデザート運びを手伝う魅音は満足げに頷く

そして1時間後…なのです

梨花

「ちよくちよく私を
こき使っわよね！」

沙都子

「また誰に話してるので
ございますのこと？」

梨花

「心配無用なのですよ」

有象無象達は早期に脱落し
圭一と秘芽も大健闘したが
『かぁいいモード』状態の
レナの前に敗北した

だけど話は終らず次に女子
部活メンバー争奪戦が勃発
混迷を窮めて店の閉店時間
まで続き、へとへと私達
は黒塗りの車に乗って家に
送り届けられた

「ご迷惑を掛けました」

「迷惑だなんて、いつも

楽しくて楽しくて”

「それなら良かった…
これからも仲良く—

「葛西？もう眠いよ—！！」

「直ちに—では、
おやすみなさい」

車のライトが見えなくなる
まで見送った私は舌打ちを
して唇を噛みながらゴミの
始末を考える…今回の部活
は本当に予想外で体調不良
を理由に抜け出そうと思っ
た程だ…にも拘わらずレナ
はニコニコと部活を楽しむ

……がり……プチュ……

鉄の味を舌で味わいながら
玄關を開け、そっとレナの
部屋に向かい寝間着を取り

風呂の湯を確認して服を洗濯機の上に乗せて中に入る

お気に入りのシャンプーがもう少しで無くなりそうだ
首の傷が染みて…痛い痛い

体中を隈無く洗う…最近
感じてきた身体の成長を鏡
で確認してみる―こんな事
が起きなければ誰かと恋を
したのだろうか？…感傷的
になる頭を振り湯舟の中に
浸かる…最良の選択だった

月明かりの下で―に濡れた
―の先に立っていた彼は…
私が見た幻なのだろうか？

本当だとして刀はどう説明
する？…許可されていても
あの扱い方は？…私が殺人
をしたのに何故警察に通報
しない？…寧ろ致命傷を与

えたのは彼だから？…違う
あの状況なら正当防衛か？
…違う…素手と刀では無理
なんじゃ？…やっぱり幻？

幻であってほしい気持ちと
本当であってほしい気持ち
が私の頭をぐるぐると掻き
回して……これは……ああ

チ力チ力…チ力チ力…

ぐるぐる　ぐるぐる

………

礼奈ちゃんは——？

バカ！——だろ？

——みる？

——たいでしょ？

.....

ふつふつ…グツグツ…

なにか聴こえる

戸を叩く音？

ガラスが割れる音だ

誰かが家に入って来たんだ

「うん、うん...お父ちゃん...」

第一章 突通し編 12

突通し編 12

玄関から居間を開けてお父さんが寝ている部屋に入ったんだ！？
お父さんと知らない男の怒声が聴こえる……お父さんお父さん

リナ？ リナ……ああコイツもゴミに出さなきゃ

「ーヒツ！？ キヤアアアア！？！？」

浴室の扉を開けて醜悪な顔がレナを睨んでいる

「何処に隠したんか言えや！！」

引き摺ってきたお父さんを狙いも付けずに蹴り殴る、例えゴミの場所を知っていても話せる訳が無い

「レナが知ってます！！」

床に崩れ落ちたお父さんを心配しながら湯舟から出る、裸など気に
してられないゴミに成る
コイツに見られるのには虫酸が走るがバスタオルで軽く拭いて手早く寝間着に着替える

「案内します」

「早せえ!!」

背中を小突かれながら玄関に向かう、お父さんは気絶しているみたいだった

「何処に行くんじゃ?」

「……来れば分かりますよ」

ああ何てバカなのだろう? 蟻地獄に片足を踏み入れようとしているのにコイツは
1つの懐中電灯の明かりは難見沢では余りに心許ない……ふふ、近くに居ればいい

「律子は此処か?」

「もう少し奥の方です」

ダム建設現場跡地のゴミ山を先に登っていきワゴン車を懐中電灯の光りで照らすと
コイツは駆け降りていった、私も降りて直ぐにしゃがんでソレを掴んで後ろに立つ

レナはゴミ袋に手を合わせて何度も何度も謝って謝って謝って謝って謝って謝って

「ふう——今、片付けないと……」

手押し車をゴミ山から引つ張り出して7つのゴミ袋を乗せて裏山に向かう

その道が私には輝いて見える、明日は楽しいに違いない

「1個だけ感謝するなら今日、お父さんを襲った事だよ」

夜中に抜け出したら怪しまれる、だが今回は決して怪しまれないし時間を気にしなくて済む
例え気絶してなくとも変わらない、これ程レナに好都合な事が起きるなんてね

「さようなら、さようなら」

土を被せていく、掘る時に比べたら簡単で直ぐに終わった——土を踏み固めシャベルで周りと同じに成るよう暈かす

.....

「ありがとう、アナタが居たから今に至れた」

視線に感謝を告げて手押し車とシャベルをゴミ山に置いて家に帰る

とお父さんがレナを抱き

締めてきたから私もお父さんを抱き締め返す

「心配は要らないよ、アイツは二度と家に来ないから」

「でも礼奈、リナさんと男は……」

「お父さんはリナと男に騙されていたの、もう家に穢れは無いから安心して寝よう」

明日は仕事を探しに行くんだよ、警察には黙っていようね」

暫く抱き合っていたレナとお父さんは一緒に家に入る

「くしゅん！？……あれれ？」

アイツの所為で風邪を引いたみたいだ、ゴミに成ってもレナを苦しめるのか！！

TIPS 無断欠勤を入手

第一章 突通し編 12（後書き）

TIPS 無断欠勤

「無断欠勤に『コレ』も一緒に消えたか」

「警察の動きに注意しろ、知らぬ存ぜぬで通せ」

「少しだけ——の周辺も探れ」

ブルルッ　ブルル―

「はい、もしもし」

『あッ葛西？　本家に取ってきて貰いたい物が〜』

「……こちらに電話は止して下さい」

『ケチケチしないでよ』

「それとご自分で取りに行ってください、では」

ツーツー

「待つ！？」——さすがに事務所に電話は葛西も怒りますよね」

「——に図書館まで持って来させますか」

第一章 突通し編 13

突通し編 13

朝っぱらから鳴く蝉に意味ないと分かりながらも「私の安眠を返せええー!!」と怒鳴り付けてみた。

ジ〜ワ ジ〜ワ チヂチ ミンミンミンミンミン

握りこぶしを作り1番近くの木を 蹴る!!!

チヂチッ ブブ〜……ピュ

「——?! うわあ〜汚い!?!」

衝撃に驚いて飛び立った蝉が放ったソレが私の顔に降り掛かった。

「ああ何してんだ」

「うう”だつて〜”」

秘いいに顔をハンカチで拭いてもらっ。次は覚悟しろ! 蝉星人めッ!!

「相変わらず仲良しだね。おふたりさん？」

瞑っていた目を開けると魅いねえがポニーテールを揺らしながら歩いてくる

「園崎が早起きか」

「一応、委員長だし。それと名前で呼んでよ」

胸を反らしたかと思うと少し寂しげに魅いねえは秘いにいを窺う。そういえば秘いにいだけ苗字でみんなを呼んでるね。

「……………魅音、これでいいか？」

「うん、秘いちゃんオツケーだよ！」

「秘いちゃん……………まあいつか」

どうやら秘いにいは『秘いちゃん』て呼ばれるのが気になるみたい。

「そろそろ準備してるのか？」

「ふえ……………あッ綿流しのこと？」

待ち合わせの場所に向かう間の話がお祭りの話題になる。

「綿菓子を全店制覇だ〜！」

「秘芽は綿菓子が好きなんだ？」

「当然！ 使ってる砂糖で甘さとか舌で溶ける感じが店ごとに全然違うのだよ」

私の綿菓子に対するスタンスに魅いねえは感心してる。——と待ち合わせの水車小屋に到着！

「おはよう！ 圭ちゃん、レナ」

「うお！？ 槍が降るぞ今日は」

「何だってー！！」と追い駆けつこを始めたふたりを笑っていると、普段なら注意か一緒に笑う筈のレナねえが黙ってたから顔を下から覗き込んでみた。

「レナねえ……元気ない？」

「——あ、ちよつと風邪引いたかも？」

「ん〜、熱は無いな」

すかさず、おでこの熱を手で簡単に測る秘いにい。

「でも寒いのか？ 厚着だね」

普通の学生服じゃなくて昨日と同じタイプの服を着たレナねえ。
私はそれに気付いて更に心配になってきた。

「うん、少し……今日が終れば明日は土曜だし頑張るよー!!」

何処と無く空元気なレナねえ……圭にいと魅いねえも追い駆けつこ
を止めて心配してた。

離見沢に来てからの日常が変わりなく過ぎていく。東京にいた頃は
楽しくなかった。

寂しくて寂しくて。だけど秘いにいが何時も一緒に居てくれたから
幸福だったよ。

そして今はとっても楽しい!! ただ残念なのはレナねえの元気が
ないことと部活も無いこと。

「レナは平気だよ！ だから部活しよ」

「だめだめ！ ゆっくり休むこと。部長命令だよ!」

「じゃあ明日は部活がしたいな！ したいな!」

みんなが顔を見合わせる。そして「風邪が直つたらね」と魅いねえがレナねえに告げた。

「はうう1日じゃ治らないよう」

「レナ、焦らないでいいのです。ボク達は明日も明後日も、ずっとその先も待っているのですよ」

そつと手を握つた梨花に顔を伏せたレナねえが何度も「本当？ 本当？」と繰り返す。

「まあ、罰ゲームがしたいってなら大歓迎だぜ！」

「あはは！ それは嫌だから休むよ」

今日初めてレナねえが笑つた気がする。さすが圭にいだね！

「圭ーさん、内心部活が無くて自分が罰ゲームを受けなくて済む。とか考えてませんこと？」

「アハハハハ沙都子！？ 可笑なことをハッハハ」

うわぁ…… 凶星だね。圭にいい格好悪い。——そんな訳で普段より早めの下校だ。

「梨花と沙都子のお家は何処なの？」

圭にいと魅いねえがレナねえに付き添って先に帰ったから梨花と沙都子と下校中。

ふと湧いた疑問をふたりに聞いてみた。

「古手神社ですわよ」

「うん、で沙都子のお家は？」

「だから古手神社ですわよ！」

ん？……理解出来ずに秘いにいを見上げる。

「一緒に暮らしてんだろ？」

「みい、沙都子はボクが養っているのですよ」

「なッ！？ むう……」

「あう……ごめんなさい」

少し考えれば解る答え……ふたりのお弁当はいつも同じだった。私の馬鹿バカ！！

「き気にしないで下さいまし！？ 慣れましたわ！」

「もう終ったことなのです」

ああ梨花も沙都子も優しい。また謝ったらふたりに悪いよね。

「その歳でふたり暮らしか？」

「はい、そうなのですよ」

私達と似たようなものか。視界に石段が入る。着いたみたいだ。

「秘名さん、見送りご苦労でしたわ」

沙都子は軽快に石段を駆け上がっていく。

「お駄賃を持って来ますから待っているのですよ」

暫く秘いにいと待っていると、梨花が紙袋を持って石段を下りてきた。

「美味しい大判焼きなのですよ。にぱー」

「おお！？ 大きいな」

「私が持つー！！んしょ」

秘いにいから紙袋を受け取って抱き抱える。

「また明日なのです」

「梨花、また明日ね」

「沙都子にもな」

「伝えるのです」

梨花と別れて帰路に着く。はあゝ夕食後の甘味が待ち遠しいよ。

TIPS 返却期日入手

第一章 突通し編 13（後書き）

TIPS 返却期日

早めの帰宅。お父さんが四苦八苦して作ったお粥を食べる。美味しい。

「あー忘れてた」

「どうしたの？」

お父さんがレナに文庫本を見せる。家のじゃない。

「リナさんの？」

聞くまでもないか。返却期日は明日らしく、お父さんは面接。レナが返そう。

「明日は学校を休んで、診療所に行くついでに返しておくよ」

みんなと会えないのは残念だけどアイツの存在を示す物は消し去りたい。依然貰った薬も切らしていたし。

第一章 突通し編 14

突通し編 14

興宮にある図書館。まだ6月、異常気象に温暖化なんて未来で言われるかもしれないが暑い。クーラーが効いた館内に入ると汗が引いていくのがわかる。職員に本を返す、ちらっと見たがラブロマンス物だった。アイツがお父さんに媚びている姿が容易に想像できる。

今朝、魅いちやんに学校を休むと連絡をしたから、後は診療所に行つて診察と痒みを直す薬を貰うだけだ。今日、明日と家でごろごろ過ごす暇潰しに、面白そうな本を借りていこうと奥に進む。

ざっと棚を流し見ていくが、レナの興味をそそるタイトルは無いみたいだ。少し落胆しながら立ち止まる、そういえば昨日から痒みが消えている。……——！？

「怖い顔、可愛いレナちゃんの顔が台なしよ」

「——あ、鷹野さん？」

平静を装い振り返る、内心は心臓が止まるかと思ったが……ただ表情までは隠せていなかったようだ。診療所の看護婦をしている鷹野三四さん。綺麗な人だけど、彼女の趣味は好きになれない。

「まだ学校の時間でしょう？ いけないわね」

「風邪を引いたみたいで休みました。診療所に行く前に本を返しに来ただけです」

納得した鷹野さんは「だけど今日、明日と家で退屈だから暇潰しに何か借りようと思った。正解かしら？」と私の心を見透かしたように当ててみせた。

「鷹野さんこそ仕事じゃないのかな？　かな？」

「休みを貰ったの。今日はデートかしらね？」

「はうう！？　デート''''」

レナはレナらしく振る舞い、私は疑問形にした鷹野さんを不思議がる。

「そうだ！　暇潰しに私のスクラップ帳を幾つか貸してあげる」

遠慮する私に無理矢理スクラップ帳を押し付けた鷹野さんは時間を気にすると自動ドアを抜け、暑い外に歩いていった。

「帰ろうかな」

外に出て自転車置き場まで進むと緑色の長い髪が視界の端に映り、私は彼女を呼び止める為に声を掛ける。

「魅いちゃん!？」

「——? ツ……!!」

まるで逃げる様に駆け出した魅いちゃん? 学校は? 魅いちゃんに悪いけど図書館と魅いちゃんは結び付かない。——不安が私の肩を叩いた、裏山のゴミ袋を確認しろと急かす。

がむしゃらにペダルを漕いで裏山に入ると、ゴミ山から持ってきたスコップを握り締める。自転車を地面に投げ出して草木を掻き分けていく。鮮明に覚えていたゴミを埋めた場所、僅かに躊躇ったが不安に押し負けて掘り返した。

「……………無い!? 無いな!?!? 無い!!」

まだ下かも? もう少し下? 有り得ない、既に軟らかい土から硬い土に変わっている。場所は間違えないなら、何処にゴミは消えた?

消えた? 違う、掘り返された!? 誰に? 魅いちゃん!? 園崎家は雛見沢の為に……殺人犯は雛見沢にマイナスにしかない。

何故ばれた? 完璧だった!! あんな真夜中に目撃者なんて居ないのだから!!!

「はぁハア、落ち着けレナ。クールになれ！ クールに」

通報しないのは明るみに出ると結局マイナスだからか？ だが何かしら咎を受けるに違いない。もしくは黙認？ ……お誂え向きの行事があるじゃないか。

「綿流し……5年目の祟りは私に下る？」

祟りを下すのはオヤシロさまで園崎家じゃない！ 魅いちゃんがレナを裏切るなんて、有り得ないよ。少なくとも綿流しまでは安心できる筈だ。

………

そうだね。まだ魅いちゃんが隠したとは決まってるし、友達を疑うのは良くないかな、かな。

………

ああ診察？ 痒みも無いし今日は行かない。風邪も家でゆっくり休めば明日には治ってるかもしれないからね。

………

今後は注意しよう。必ず誰かがレナに接触する筈だ。

第一章 突通し編 15

突通し編 15

カーテンの隙間から差し込んだ日の光りに、もぞもぞと布団を退かして伸びをした後、中から這い出て喉の具合を確かめる。以上無し、身体は？ 節々も痛くない。首筋等の堪えようのない痒みも湧かない。治ったのかな？ でも今日は大人しく家に居ようと心の中で決めた時、お父さんの私を呼ぶ声が聞こえた。

「お父さん？ まだ7時だよ。今日は日曜日なのに」

「礼奈のお友達が来てくれたよ。具合は？」

「良い感じなんだよ。誰だろ？ 行ってくるね」

本当に朝から誰だろ？ お見舞いにしては早過ぎる時間だ。まだ少し肌寒い廊下を抜け、玄関に向かうと玄関越しに確認できた人影は1つ。

「魅力ちゃん？ 圭一くん？」

玄関を開けようとして首筋の傷を隠す物が無いことに気付いた私は、戸を少しだけ開けて相手を確認してみる。

「具合は大丈夫か？ レナ」

「——秘名くん？ 珍しいね！？ 秘名くんから会いに来るなんて」

「魅音から聞いてないのか？」

魅いちゃんから？ レナはあれからどうやって帰ったんだろ？ 微かに電話に出た記憶が残っているが内容を思い出せない。相手が園崎魅音なのに！！ 私が曖昧な顔をしていると彼は溜息を吐いた。

「魅音で、どっか抜けてるよな？」

同感だよ。肝心な時に役に立たないのが魅いちゃん。あの時だって魅いちゃんは傍観者だったよね。

「無理にとは言わないが、風邪が治ってたら、これから興宮に魅音達と行くけど……行かないか？」

どうしよう……休むべきだけど体調は頗る良い。魅いちゃんに秘名くんにも聞きたい事があるし。——ん？

「ねえ秘名くん。秘芽ちゃんは？」

「秘芽は魅音と一緒に圭一を迎えに行ってる」

成る程。振り返しは怖いけど少しだけなら構わないかな？ かな？
レナは行く主旨を秘名くんに伝えると部屋に着替えに戻る。序でお父さんに友達と興宮に行くことを話すと、心配してたけど私がにこりと元気をアピールすると無理はしないようにと言って許可してくれた。

いつもの待ち合わせ場所に自転車を押して集合した私達。3人からレナを気遣う言葉に感謝を述べてから、興宮に向けて大きくペダル

を漕いでいく。病み上がりの為に少し遅れがちになる私を秘名くんがフォローしてくれる。妹が居るだけでこつも違うものなのだろうか？

目的地はおもちゃ屋さんだった。一体何を魅いちゃんはする気だろ？

「梨花ちゃんと沙都子が居ないな」

「少し早かったね。何か飲む？」

魅いちゃんが示した先に自販機が見える。秘芽ちゃんは「私、コーラがいい」と元気良く挙手までした。

「何時から炭酸飲めるようになった？」

「の飲めるよ！ 子供じゃないもん！！」

「ついこの間も辛い辛いつて言ってたのに？」

ぶーっと頬を膨らませた秘芽ちゃん。確かに小さな頃は炭酸が苦手って子も居るよね。飲めるとちよつと大人になった気がするんだよ、だよ。

「レナはどうする？」

「100%のりんごを頼めるかな、かな？」

「魅音の奢りだ！ 飲め飲め」

いや圭ーくん、まるで自分が奢るみたいだよ？

「圭ちゃんは自分で買ってねー！ 秘芽ちゃん一緒に買いに行こう」

すぐ圭くんは調子に乗るから。本当に自腹で飲むのは男の意地なのかな？ 圭くん……。

「かつ——シュワシュワするー!?」

うん炭酸だからね。結局秘名くんがコーラを代わりに飲んで、涙目の秘芽ちゃんは秘名くんから貰ったカルピスを美味しそうに飲んでいる。もしかして秘名くんは秘芽ちゃんがコーラを飲めないからカルピスにしたのかな？

おもちゃ屋さんの前の椅子に並んで座り、梨花ちゃんと沙都子ちゃんが来るのを待つレナ達。私は話をしたい2人が隣に居るのに圭くんは秘芽ちゃん、それにゴミを隠したかもしれない魅いちちゃんと分別を手伝ってくれたかもしれない秘名くんが一緒では聞くに聞けず。今日みんなに付き合ったのは失敗だったかと後悔し始めていた。

第一章 突通し編 16

突通し編 16

白い世界。ベッドもカーテンもタイルも、何かの薬品の匂いが暑さと相俟って私の気分を更に悪くする。ああ退屈だ。

「——これは何に見える？」

「ええ……と、難しいですわ」

パタパタと服を扇ぐ。赤と青のマーブル模様に悩む彼女を横目に、それが水溜まりに落ちた蝉、いや蝸に私は見えるのだが。——ミンミン、やっぱり蝉だな。

「暑いですね。本当に」

団扇で私も一緒に扇いでくれる人は雛見沢唯一の診療所の開業医だ。医者と言えば白髪混じりのお爺さんを想像するが彼は若い。この若さで開業したと結構有名だったりする。私には人の良いメガネのお兄さん——とまでは言わないが、くすくす。

「先程から時計を気になさっている様ですが、何かあるのですか？」

「みい。おもちや屋さんで友達と約束しているのです。既に1時間も遅刻で、ワンワンお怒りなのです！」

頭の上に手を乗せて握り、犬みたいに話すと「すみません。もう終

わかりますから」とニコニコしながら彼は謝った。ふむ、がるゝと唸ってやると余計に暑くなってしまった……入江、入江が犬の真似をしても可愛くないわよ。

「りゝかゝ終わりましたわよ。早く行きましょう!」

ああ沙都子の方が似合う。仕草が子犬にそっくりで、本当に小さな尻尾が見えるようだ。

「検査結果は良好ですね。今日は約束がある様ですし、帰って良いですよ」

「お許しを頂きましたわ。さあさあ梨花! 行きますわよ」

カルテを流し見た入江は、早く友達の所に行っておいでと先程まで沙都子に即答しにくい質問や本に書かれた奇妙な絵を見せていた看護婦の鷹野に診察室のドアを開けるよう指示する。

「沙都子ちゃん。またね!」

「ええ、今度新しい子を見せてくださいましね?」

ぬいぐるみ仲間の鷹野と沙都子は妙に仲が良い……少し妬けてしまふ。

「りゝかゝ? 早く早く!!」

「ほら呼んでるわよ。楽しんできてね」

鷹野に手を振られながら何時の間にか診療所の玄関で待っていた沙

都子の所まで駆け寄り、陽射しが眩しく蝉達が合唱する中に飛び出して、私達は手を繋いで坂を駆け降りていく。

「彼女の容態を診てきます」

「ご熱心ですわね。先生？」

鷹野の半分冗談とは言え疑いの籠った微笑に咳払いをして、入江は彼女が居る病室に入った。

梨花と沙都子がおもちゃ屋にやって来ると店の前に自転車の山と子供達が奔めいていて店内に入るのにも一苦労だと悟り、ふたりは覚悟を決めて自分達の自転車を脇に止めると突撃の準備をする。

「1、2の3で行きますわよ。梨花！」

「オーケーなのです。みー」

今まさに最初の一步を踏み出そうとした時に店の扉が開き、初夏に映える緑のポニーテールを左右に揺らす魅音が現れると、ザアと道が開いて梨花と沙都子は勢いを殺せずに躓いて転げかけた。

「遅かったねー。おじさん達、待ちくたびれちゃったよ！」

「申し訳ありませんわ。それでも急いで来ましたのよ！」

「診療所からここまでずっと走って漕いで……へとへとなのです」

立ち止まった事で玉の汗が吹き出す沙都子。梨花は額に黒髪が数本ぺたっと張り付いている。

「冷たいオレンジとグレープジュースだよ。おじさんの奢りだから気にしないで飲みな！」

放物線を描いてオレンジが投げ渡され汗を拭っていた沙都子は慌てて掴み、梨花にはグレープが普通に手渡された。

「——ごくごく。ぷは！ 癒されましたわ」

ブルタブを上げて一気にジュースを飲み干した沙都子は魅音にお礼を言つて、ゴミ箱に空いた缶を放り投げる。

「冷たくて気持ちいいのです。みい〜」

梨花はすぐに飲まずに頬つぺに缶を当てて身体の熱を冷ましつつハンカチで額の汗を拭く。ふたりの性格の違いが出ていた。

ふたりが落ち着いたところで店内に入る。中は外以上に暑い。窓は開いているがむあつとした空気……と言うより熱気が満ちている。

「聞け沙都子！ 賞金は5万円だぞ！？ 圭一王国の——」

圭一の発言を聞き終える前に沙都子と梨花はレナに捕食された——もとい万力の様な力で抱きしめられた。レナ曰く汗に濡れた梨花ちゃんに沙都子ちゃんときたらかぁいい過ぎるらしい。

「はうはう梨花ちゃん沙都子ちゃん！？ レナのお家に行こうよ！！ 朝までそれは楽しいお話をしようね！！！！！！」

アリクイの様な舌で舐め廻され、ふたりは来た時以上に濡れぬれに

なっていく。

「——ハッ!? 圭ちゃん! 秘いちゃん! 梨花ちゃんと沙都子が溺死しちゃうよ!!! レナを止めて!!!!!!」

ぽかーんと思っていた魅音はたと我に返り、指示を飛ばすが圭一と秘名は躊躇う。相手は『かあいモード』フルスロットルのレナでありとても無事では済まない事は明白だからだ。

「……圭一、後は任せた。秘芽くほら着せ替え人形だつてさ!」

「か、かあい〜」

瞳を輝かせレナの口癖が移った秘芽と一緒に、体よく逃げた秘名に絶望しながら死地に一步踏み入った圭一。

「(考える考える前原圭一! タイムリミットは僅かだ。心肺停止したら一刻を争う!!)」

圭一の脳細胞が高速で活動し始める。かあいモードを何とかすれば部活で1位も見えてくると頭を後ろにのけ反らせ、ぶつぶつと何やら呟き——カッと目を見開いた。

「聞けレナ! 今ふたりをお持ち帰りしたい気持ちは俺にも分かる!!!」

レナが首だけグルリと回しツタ瞳で圭一を捉らえ、魅音と秘名に秘芽は圭一の危ない発言に3歩下がる。

「だがレナ——今回の賞金は5万円だ! それを手にしてからでも、

お持ち帰り〜 は遅くはない筈だぜ！！

5万だぞ5万円！！！！！！ それだけあれば梨花ちゃんと沙都子
それはそれは可愛いデコレーションできるッ」

「でデコレーション？」

「レナが望む姿の梨花ちゃんと沙都子が「お帰りなさいませ。レ
ナお嬢様」も実現可能な賞金なんだ！

あそこで群れてるザコ共を相手にする前に力を使い切ってたら夢の
また夢で終るぞ！！

今はクールに上を見るんだ！ 賞金が納められた台座をなああ！！
！！！！」

ドッオオオオオオオーン

「そうだね圭くん。梨花ちゃん沙都子ちゃん！ レナは掴むよ！
！ ふたりとの夢の実現の為に！！！！！！」

圭一の話術により解放された梨花と沙都子はレナにツツコミを入れ
る気力すら削ぎ落とされていた。

「さあ始めるよ！ 賞金5万円を賭けた——課外部活INおもちゃ
屋大会を！！！！！！」

ピカッアアアアアーン

右腕を6回転半も回して天高く突き上げ、これでもかと言う不敵な笑顔で魅音はクジが入れた箱を、おもちゃ屋店主が用意した遊戯スペースのテーブルの上にドンツと置く。

「数が多いからね。早い者順で外に居る連中は間引いたけど……諸君には6つの組に分けさせてもらおう！」

テーブルは魅音がクジを置いた物を除いて6つ。そろそろクジを引いて示された席に子供達は座っていく。

「一緒だね、沙都子」

「手加減はしませんわよ」

部活メンバーは沙都子と秘芽が同じ組になった以外はバラバラに組分けられた。

「（見たことない子だ。興宮の子かな？）」

秘芽が同じ組になった子達を観察している間にルールが魅音によって説明される。

「このおもちゃ屋にあるゲームで各組戦ってもらおう。

決まらない場合は店のマスターが選んだ物で戦うこと。

勝負が付かない場合も店のマスターの采に従うこと」

最後に負けた人はプレイしたおもちゃを必ず購入してね！ と付け加えられた。

参加者は19人。トーナメント形式。各テーブルの1位のみが決勝

に進める。

また何時もと変わらない。変わる訳がないか？ 強いて言えばメン
バーが被った事ね。……ふう楽しみもつまないと楽しまなくちゃ
ダメよね。

TIPS 偽名を入手

第一章 突通し編 16（後書き）

TIPS 偽名

診療所の1番端の病室に入江は入り、ベッドを区切るカーテンを開けた。そこに居たのは寝息を立てる赤みが掛かった長髪、整った顔に白い肌の女性。布団を掛けている為に今は見えないが左手両足、右脇腹に包帯が巻かれている。

「まだ目を覚ましませんか」

布団を退けて触診しようと脇腹に手を伸ばしかけた時に彼女が目を覚ました。

「……ん、白い天井。それと変質者だ」

苦笑しながら、「見て分かりませんか？ 医者です」と答える入江を色素の薄い赤茶色の瞳がベッドの上から可能な限り上から下まで見詰め直す。

「ふうん。マッドサイエンティストか」

「冗談がお好きな様ですね？ 赤槻 深紅さん」

失礼ですが身元を確かめるために所持品を見させて貰いましたと告げ、入江は最後に一言付け足した。

「まるで偽名みたいな名前ですね？」

一瞬の静寂。先程まで鳴き続けた蝉達が合唱を止め、そよそよカーテンを揺らしていた風も止んだ。

「……………センス。不用意な発言は命を落としかねませんよ?」

唯一動かせる右手が入江の首に伸びていく。猛禽類を思わせる鋭い瞳孔に魅入られ動きを封じられてしまう。

「——なんて。名前気にしてるから、昔から……………特に小学生の時はイジメられたし」

フツと表情を和らげた彼女が入江に注意し始める。入江が気が付くと蝉達が合唱を再開していた。

「あ、ああ済みません。申し訳ありません」

頭を下げる入江に満足した彼女は今度は自分の身体を確かめる。

「全治は何時頃? 祭りに間に合いますかね?」

「今月一杯は安静にする必要があります」

「……………絶対? 1週間ちょっとで治りませんか?」

「仮に目覚ましい回復力で1週間で治ってもリハビリがありますから、祭りは無理です」

「く車椅子なら可能では?」

「誰が押すのですか？」

落胆した彼女はベッドに体を沈め布団を頭まで被ってしまった。

「それでは、くれぐれも安静にして下さいね！」

ボタンとドアが閉まる音を聞いて彼女は盛大な溜息を吐いてふて寝を決め込む。

「旅行者かしら？ カメラを持っていたしね」

病室から出ると鷹野が入江を待っていた。

「谷河内の山中で遭難。何とか人里に降りてきた所で倒れたのが筋か……」

「納得は——してないみたいですね？」

「身元も割れたけど……壊れていたあのカメラは高価な物らしいわ」

「自分の事で一杯一杯なのは？」

入江は鷹野が何故彼女に何かしらの疑いを向けるのかが解らない。

「カメラを持参した旅行者。さぞ難見沢の景色は写真に納め甲斐があった筈。谷河内まで赴く程にわね」

納得した入江は、視点が違う鷹野に関心して自分も顎に手を当てて考える仕草をする。ただ考えるのは鷹野達の仕事だと体だけそれらしくただけだが。

「ッアア!?!? カメラ、私のカメラは――!!!!!!」

.....

「もう昼休みでしたね。それじゃ所長」

ひらりと踵を返して去っていく鷹野に悪いと思いながら入江は、くつくくと笑いを堪えるだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9912i/>

ひぐらしのなく頃に別談

2010年10月9日22時05分発行